
真・恋姫†無双異聞～皇龍劍風譚～ 外伝

YTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双異聞〜皇龍剣風譚〜 外伝

【Nコード】

N5282Q

【作者名】

YTA

【あらすじ】

この作品は、真・恋姫†異聞〜皇龍剣風譚〜の外伝に位置するものです。

姑獲鳥 第一章（前書き）

今回は、華雄と一刀が怪異に挑むお話です。

詳しくはあとがきで書きますが、夢枕獏先生の『陰陽師』のパロディとしての色が濃い為、全体的に静か且つ、暗めのトーンになっています。

では、どうぞ！

姑獲鳥 第一章

壺

秋も深まり、涼風が肌に心地良くなってきた頃の事である。

巴郡の警備隊長である華雄は、ゆったりとした足取りで、巴郡で最も大きな街の大通りを歩いていった。

馬には乗らず、徒歩かちである。一昔前の漢王朝の世ならば、一度は驍騎校尉にまで登り詰めた華雄程の人物が、供も連れずに街中を徒歩で歩き回るなどと言う事は、そうあるものでは無かった。

しかし、戦国乱世の上に築かれた今の三国鼎立の世では、そう珍しい事でもない。

武士達もののふが、一度は失っていた気骨を取り戻したと言う事も大きな要因ではあるが、何よりも、大陸の各都市の治安が段違いに良くなった事が最大の理由だろう。そもそもこの大陸は、一人の人間を頂点とした中央集権国家が長期的に統治するには、余りに広すぎるのである。

漢王朝にしても、宮廷内のゴタゴタを別にすれば、その廃退の要因が、地方の役人たちの専横を取り締まり切れなかった事にあるのは、明白であった。しかし、諸葛亮孔明が唱えた『天下三分の計』は、結果的に、この問題を見事に解決していた。

大陸の中央に都を置くだけでなく、更にそれぞれの国にも、統治

能力を有する首都を置く事で、地方の役人たちに対しての監視の眼を、今までとは比べ物のならない程に鮮明にする事が出来たからだ。加えて、民草が国の権力者に対して直に嘆願できる“目安箱”の設置や、常時、街の治安維持を主任務とする“警備隊”の発足も、かなりの効果を上げていた。街にもよるが、今では、昼日中の追剥は勿論、町人相手に無体を働く役人など、殆ど見かけない。

華雄は、刈り入れの季節を前に忙しく行き交う人々の中をすり抜け、街の郊外に続く道に歩を進めた。

「頼もう！」

街の北東にある目的の屋敷の門前で華雄が来意を告げると、薄緑色の袍パオを着た少女が、音も無く屋敷の奥から現れた。

年の頃は数えで四つから六つの間ほどで、濡れているのかと錯覚するほどの光沢のある髪は“おかっぱ”に短く切り揃えられ、何処となく愛嬌のある離れた目と、大きな口をしている。

「そちらは、華雄様でございましょうか？」

少女は、思いのほか大人びた口調でそう言った。

「お、おう。如何にも、華雄だが——お前とは何処かで顔を合わせたかな？」

華雄が首を傾かしげながら尋ねると、少女は黒目が勝った大きな眼を細めて笑った。

「いいえ。我が主、北郷一刀様が先刻わたしをお呼びになり、『もうすぐ華雄將軍がおいでになるから、奥に御通ししなさい』と御申し付けになりましたので」

少女はそう言うのと、「一刀様がお待ちです」と言っ、先に立って歩き出した。

「おい——」

華雄は、さっさと歩いて行ってしまう少女に急ぎ足で追い縋すがり、しきりに首を傾げるのだった。

華雄の姿を見止めた北郷一刀は、庭に面した広い板敷オンドルの温床から、

腕枕をして横になっていた身体を起こした。温床とは、竈かまどの煙が床下を通るように作られた、言わば、中国風のセントラルヒーティングである。

普通、民家などでは寝る為の場所に引き込むそれが、どう言う訳かこの屋敷では庭に面した軒下に作られており、滞在する為の屋敷を決める際、一刀が甚いたくこの温床を気に入って、長く人の住んでいなかったこの屋敷に腰を落着ける事にしたのだった。

「よう、よく来たな」

一刀はそう言って微笑みながら、少し肌蹴はだけていた着物の裾を整えた。『着流し』と一刀が呼ぶその白い服は、街の服屋に大柄な人間用の上着を仕立て直させた物で、ここ数日の一刀の普段着になっている。

「ああ。突然に邪魔をして、相済まんな」

華雄は、一刀に身振りで進められるままに温床に腰を降ろすと、「土産だ」と言って、手に持っていた大きな徳利を、自分と一刀の間に置いた。

その中身は言わずもがな、一升程の酒である。

「酒かい？」

一刀が、察していながらも一応そう尋ねると、華雄は小さく頷いた。

チンチュウ
「清酒だ」

華雄が短くそう言うと、一刀は嬉しそうに白い歯を見せた。

「それは良い。ちょうど今朝、近くの農家の主が活きた山女ヤマメを持ってきてくれたんだ。まだ台所の桶で泳いでる。それを焼いて、一杯やろう」

一刀が二度手を叩くと、あの少女が今度も音も無く現れて、一刀から徳利を受け取った。

「これを瓶子へいじに移してくれ。それから、あの山女を四尾ほど、塩焼

きにな」

少女は「あい」と返事をする、再び奥に引っ込んだ。

「ふん。まだ日も高い内から、結構な事だな」

華雄は窘める様にそう言いながらも、香ばしく焼き上がった山女の事を考えて、頬を緩めた。

「何だ、呑まんのか？」

「いや、出された物は呑むとも！」

華雄は慌てそう言ってしまってから、悪戯っぽく微笑む一刀に気付き、拗ねた様に口を尖らせて、頬を赤くした。

「せっかく土産を持って来たと言うのに、随分な話だ」

「まあ、こちらも山女を出すのだし、少しからかった位でそう膨れるなよ。ところで、何か用があって来たんだろう？ 魚が焼き上がる迄に、その話を聞こうか」

事もなげにそう言った一刀に、華雄は驚いた顔で尋ねた。

「どうして分かったのだ！？ それも、噂の仙術か？」

「まさか。警備隊の隊長が、“まだ日も高い内”から、酒徳利片手に四方山話もあるまいと思っただけさ……。しかし、お前のその言葉から察するに、俺が遣うと噂の“仙術”絡みの話のようだな？」

華雄は、一刀のその言葉に、静かに頷いた。

「うむ。しかし、“あの話”は、真の事なのか？」

「あの話？」

「ああ、大樹屋敷の庭にいた蛙を、風に舞う木の葉で潰してしまっただとか言う……」

「やれやれ、噂は千里を走るか？ 大したもんだ」

一刀は、それを聞いて、苦笑いを浮かべた。

そもそも、一刀が『人ならざる力』を使役出来る事を大々的に喧伝しよう、と言い出したのは、費？ こと聳孤であった。

皇龍王への変身は言わずもがな、卑弥呼に授けられた『鬼道』の秘術も、ある程度は開けっ広げに『天の遣いの御業』としてしまっ

た方が、一刀に良い感情を抱いていない抵抗勢力による誹謗中傷、所謂、現代で言うところのネガティブキャンペーンに対する先手になる、との考えからである。

しかし、取り合えず噂を広めたは良いものの、早速その弊害が一刀を襲ったのは、滞在を決めた巴郡の大都市郊外に住む豪族の邸宅、通称『大樹屋敷』に、帰還祝いの宴に招かれた時の事であった。

屋敷の呼び名の由来ともなっている、樹齢数百年を数えると言う大樹の下に設えられた卓に座って屋敷の主に杯を受けていた一刀に、土地の名家の出であると言う青年貴族が唐突に、「御遣い様が天の国で学んできたと言う仙術や方術で、人を殺す事などは出来るのですか？」と尋ねて来たのである。

それが、高貴な生まれ故の無邪気な質問であれば可愛げもあるだろうが、その青年の眼には、明らかな猜疑と蔑みの色が見てとれた。つまり、どこの馬の骨とも知れぬ『天の遣い』の化けの皮を剥いでやろうと言う青年の魂胆を、その眼差しが如実に物語っていたのである。

この時代に於いて、“血統”と言うのは、現代とは比べ物にならない程の優越感を備えるものだ。

例えば、袁紹こと麗羽の相手を辟易させる程に尊大な態度も、その相手が下剋上上等の群雄達であればこそ、あのように適当に押し回れているのである。一般庶民からすれば、実績では勝っている一刀よりも、『四世三公』と謳われた名門中の名門である麗羽の方が、遥かに恐れ多いに違いない。

この青年貴族もその例に漏れず、選良種たる家柄から来る優越感故に、自出不明でありながらこの大陸の支配者の一人となった一刀に対して、暗い想いを抱いている事は明白であった。この場で言葉を濁して言い逃れれば、「天の遣いは大嘘吐きだ」と言う噂を、喜び勇んで吹聴して回る事は目に見えている。

「いや、この大地に影を落として呼吸をしているものを、術を以て殺すなどというのは、そう生半かな事ではありませんよ」

一刀はそこで声を落とすと、穏やかながら凄みを効かせた声で言った。

「最も、その方法が無い訳ではありませんがね……」

これで、恐れをなして話題を変えてくれればいい。

一刀は内心そう念じていたが、青年はどうあっても引き下がるつもりは無いらしい。顔を青くして頬を引き攣らせながら、それでも傲慢な笑みを崩そうとはしなかった。

「ほお。つまり、簡単ではなくとも、殺せるのですね？」

一刀は内心で舌打ちをしながら、「ええ」と返事をした。

「なら、そう——あの蛙を、術を使って殺して見せてはくれませんか？」

青年の指差した先には、冬眠の為にやって来たのか、大樹の根元をピョンピョンと飛び跳ねている緑色の蛙が居た。

「まあ、出来なくはありませんが——。ただ、殺す事よりも、生き返らす事の方が遥かに難しいのです。ですから、座興の様に命を奪うのは、気が進みませんね……」

「そこを曲げて、何とか」

「何とか、ですか……」

一刀は思案気に俯き、暫くの間、顎に手を当てて考え込んでいたが、ふと顔を上げて屋敷の主に尋ねた。

「御亭主。あの蛙、見るのは今年が初めてですか？」

「は？ い、いえ、去年も、あれと似たのがおりました。この樹の根元には、毎年そこいらの田畑から墓^{ひき}などが何匹か冬眠に来るのですが、あの様な色の蛙は珍しいので、覚えておりますよ」

壮年の亭主は、細く伸ばした髭をしごきながらそう答えた。

「良いでしょう。殷^{ちゅうおう}の紂王でもあるまいに、戯れに命を奪うのは気に入りませんが、どうしても仰るのであれば……」

一刀はそう言うと、地面に舞い落ちていた大樹の葉を一枚取り上げ、何やら小さく呪文を唱えると、青年に向かって優しく微笑んだ。

「私の学んだ方術を用いれば、あなたの頭蓋も、簡単に潰す事が出来るのですよ？このように……」

一刀はそう言うのと、掌に乗せた大樹の葉に、静かに息を吹きかけた。

葉は、まるで中空から糸に操られてでもいる様にふわふわと宙を舞って飛んで往き、蛙の上に静かに落ちた。

その次の瞬間、

グシャリ

と言う気味の悪い音と共に蛙は押し潰され、その骨や臓物が、周囲に不気味な赫^{あか}い円になって四散した。

「これで、ご満足ですか？」

青年は勿論、事の成り行きを興味津津に見守っていた人々は、色を失くした様な顔で、「ああ」とか「うう」と唸っていた。

「そう言えば、この見事な大樹は、樹齢数百年を数える霊験あらたかな神木だとか？」

一刀が何事も無かったかの様に亭主に尋ねると、亭主は青い顔で何度も頷いた。

「え、ええ。何でも、かつてこの地を治めていた人物が、高祖様より拝領した物だとか。今でも、子孫繁栄を願って年に一度、周辺の民を招いてこの樹を奉る祭礼をしております……」

亭主の言葉を聞いた一刀は、「成程」と言って頷いた。

「それ程に信仰を集めている神木に、一冬も抱かれて眠っていた蛙ならば、人の言葉くらい聴き分けたとしても、おかしくはありませんね」

一刀はそう言うのと、ガクガクと膝を震わせている青年を見て言った。

「もしかしたら、いつかの晩、あなたの夢枕に立つ事があるかもしれ

れませんね」

「なんと！あの蛙が、私に祟りを成すとおっしゃられるのですか！？」

「もしも誰かに、『戯れに“あれ”を殺してみよ』などと面と向かって言われたら、あなたならどうします？」

「！！！！？」

一刀は、今やいつ股を濡らしてもおかしくない程に怯える青年の肩に手を置くと、優しい声で囁いた。

「何、そうならない様に、あの蛙は私が丁重に弔いましょう。あなたの言葉に頷いた私にも、同様に責がありますから」

一刀は懷から手拭いを取り出して、蛙だったものを愛おしげにそれに包むと、徐に亭主おもむろに向き直って頭を下げた。

「折角の宴の興を、すっかり殺そいでしまいました。御無礼の段、平に御容赦願いたい」

それから一刀が暇乞いをして、誰も引き止めるものは居なかったのは言うまでも無いだろう。

式

「あれはな、蛙に術を掛けたんじゃない。あの場に居た“人”に、ちょっとした『呪まじない』を掛けたのさ」

一刀は、華雄の顔を見遣って事もなげにそう言った。

「人に？」

「ああ。あの場で言い逃れる様な事をすればどうなるか、宮中に身

を置いていたお前なら、身に染みて分かっているだろう？」

「ああ……」

華雄は、一刀の言葉に深く頷いた。彼女の主である董卓こと月は、一刀の話に出て来た青年貴族の様な人間達によってばら撒かれた“噂”の犠牲者だったのである。

「だから『言葉』を使って、奴らに蛙が“死んだ様に”見せかけたんだよ。俺が居た国じゃ、催眠術とか、暗示なんて呼ばれてる、呪いでね」

「何！？じゃあ、蛙は死んでいないのか！」

「当たり前だ。俺は、座興で命を弄ぶ様な真似はしないよ。あそこに残してきたんじゃない具合が悪いんで、此処に持って帰って来た。お前も、もう“会って”る筈だぞ？」

一刀の言葉に、華雄はあんぐりと口を開けた。

「馬鹿な。ここに来るまでに、蛙など見てはおらん！」

「いや、お前は会ってるよ。それも二度、いや、三度か。なあ、“はくりよく薄緑”？」

一刀はそう言って、酒の入った瓶子と二つの杯を乗せた盆を持って来た幼い少女に、にっこりと笑いかけた。

「まさか——」

華雄は、「あい」と返事をしながら微笑んで盆を置いた少女を、まじまじと見つめた。

その黒目が勝った、間隔の空いた大きな目と、思い切り開けば大人の拳骨でも入ってしまいそうな、大きな口を。

「ちようど、女手が足りなくてどうしようかと考えていたんでな。

数週間ばかりの為に雇い入れるのも申し訳ないし、月や詠を成都から態々わざわざ呼び寄せるのも悪いしな。いや、実に助かったよ」

一刀はそう言って、愉快そうに笑った。

「一晩ほど掛けて構わないなら、話してやるぞ？」

何をどうして蛙を少女に変えたのか、詳しく話せと一刀に迫る華

雄に帰って来た言葉である。

いかに諦めの悪い事で有名な彼女でも、そう言われては黙るしかなかった。華雄は、諦め云々よりも何よりも、小難しい話が大嫌いなのである。

「まあ、取り合えず、『遣い魔』みたいなもんだと思っていれば、間違いは無いよ」

『式神』についての触りを話そうとしたとたん頭を抱えて唸り出した華雄に、一刀はそう言って苦笑しながら、酒を勧めた。

「おう、済まん」

華雄は、杯を満たされるとコロリと表情を変え、嬉しそうにそれを一刀に向かって掲げたあと、ぐいと一息に飲み干した。一刀もそれに倣い、杯を空ける。

「ほう。これは美味しい」

「そうだろう。私がいつも最前もへだにしている酒屋で、一番良い清酒だからな！」

華雄は、驚いた顔で空の杯を見つめた一刀に、我が事のように胸を張りながら言った。

「ああ。これならば、さぞ川魚に合うだろう」

一刀はそこで、台所から漂い始めた香ばしい匂いに鼻をひくつかせてから、再び華雄の顔に視線を戻した。

「で、お前の用向きの話だが？」

「おう、そうだった。お前の話が余りに難しいから、すっかり忘れていたぞ」

「おいおい、まだ三十文字分も話していなかったぞ？」

「五月蠅い！聴く気が有るのか無いのか？」

一刀は、華雄の傍若無人な物言いに肩を竦めると、手酌で自分の杯を満たしながら、顎をしゃくって話の続きを促した。

「む、何やら馬鹿にされているような――まあ良い。実は昨日、近くの村の庄屋から、警備隊に嘆願書が届いてな。その村に姑獲こかく鳥が出没して、乳呑み児を攫って行ったと言うのだ……」

華雄は、苦虫を噛み潰した様な顔でそう言うと、一気に杯を飲み干した。

参

姑獲鳥こかくちょう

それは、羽毛を纏って怪鳥になり、羽毛を脱ぐと女怪となると言う妖物で、荊州で多く目撃されたと言う逸話が残っている。天帝少女、夜行遊女と言う、まったく正反対のニュアンスの別名を持ち、雄はおらず、その全ては雌で、人間の子供を攫っては養子として育てるのだと言う。

「ふうむ。荊州のすぐ隣のこの辺りで目撃されたとしても、不思議じゃないが――」

一刀は、華雄の「姑獲鳥については知っているか」と言う問いに頷いて、そう言ったきり目を閉じ、立てた片膝の上に置いていた両腕に顎を乗せて、動かなくなった。

華雄が、もしや寝てしまったのではないかと訝しんで顔を覗きかけた頃、一刀はパチリと目を開いて、「焼けたようだな」と呟いた。華雄が、またしてもぽかんと口を開けていると、薄緑が香ばしい湯気を上げて程良く焼けた山女を二尾ずつ、二つの素焼の皿に笹を敷いた物に乗せて運んできた。

「喰おうよ」

「う、うむ……」

薄緑に「ありがとう」と礼を言って何事も無かった様に箸を伸ばす一刀に釣られて、華雄は直接手に持った山女にかぶり付いた。

「旨いな」

「うむ！」

二人はそう言い合って手酌で杯を開けながら、暫く無言で芳醇な川魚の味を堪能した。

一刀が再び口を開いたのは、二人が綺麗に骨を残して魚を食べ終わり、華雄が口を押さえて満足げに小さな“げっぷ”をし、一刀が何処から取り出した天の国の煙草に火を点けて、最初の紫煙を吐き出した頃の事だった。

「お前は、信じてるのか？」

「ん、姑獲鳥をか？」

「ああ」

華雄は、魚の脂でてらてらと光った指をしゃぶりながら、一刀の問いを思案して首を傾げた。

「ううむ、どうとも言えんな」

「ふむ。と言うと？」

「上手くは言えんのだが、私は武人だからな。罵苦だの、今日の薄緑だの、目の前に“こう言う物だ”と出されれば、まあ、大概のものには信じられるのだが――」

華雄はそこまで言うのと、盆の乗せてあった濡れ布巾で指を拭って、自分の杯を満たした。

「姑獲鳥は見えていない、か？」

代わりに答えた一刀の言葉に、華雄はコクリと頷いて、杯を空けた。

「だが、姑獲鳥の仕業だとされる拐かどわかし事件が起き、それを目撃した者が居る以上、姑獲鳥に関わる何かがそこにあるのは、間違いないとは思うな……」

一刀は、何やら得心したように頷いて、華雄を見据えた。

「よし。その話、詳しく聴こうじゃないか」

姑獲鳥 第一章（後書き）

今回のお話、いかがでしたか？

まえがきでも書いた通り、この作品は、夢枕獏先生の『陰陽師』に強い影響を受けた、パロディでもあります。なので、文体や語り口など、意識的に似せて書きました。

蛙を云々のくだりは、夢枕先生も作中取り上げていらっしゃる、安倍晴明の有名なe pをアレンジしたものです。

蛙を式神として密かに持ち帰る結末は同じですが、ディテールは殆ど変えています。

この作品を書こうと思ったのは、

1. 折角、華雄を出したんだから、他の恋姫達とは違うスタンスで一刀と関わらせなかった事。

2. 一刀が卑弥呼に授かった“鬼道”は陰陽道の源流である、と言う説がある事。

3. たまたま夢枕先生の『陰陽師』シリーズを読み返していて、一刀と華雄を、安倍晴明と源博雅の様な関係に出来ないかな？と考えた事。

でした。

で、どうせならいっその事、『陰陽師』のパロディとして、外伝を一編書いてみようと言う結論になったのですが、物語全体のトーンが静かな為、華雄のハチャメチャ振りが描き切れてませんね……。

実はこの作品は、T I N A M Iでも、最後の章を残して未完になっている作品です。

理由はまあ、よくある話で、書いていたデータがP Cトラブルで消えてしまい、どうしてもモチベーションが上がらなくて暫く保留、と言うやつです（もちろん、将来的にはきちんと完結させるつもりです）。が、本編にも、この一件の事が（ほんの触りですが）出てきたりするので、『こんな事がありました』という事をお知らせする為にも、出来あがっているものは随時投稿する事にしました。

では、また次回お会いしましょう！！

姑獲鳥 第二章（前書き）

姑獲鳥が現れたという村に向かった一刀と華雄が見付けた物とは…。

では、どうぞ！

姑獲鳥 第二章

壺

一刀達が滞在している巴郡の街から程近い村の庄屋、張福夫妻の、今年の春に産まれたばかりの惣領息子に対する可愛がり様は、並大抵のものではなかった。それまでに成した子がこゝろ尽く女だった事に加え、彼自身が既に老境と呼べる歳に差し掛かっていた事、妻の歳から言っても、これが最後の子であろうと覚悟していた事などの全てが重なっていたのだから、その様は推して知るべしであろう。

娘たちは既に成長して手を離れ、嫁に行ったり奉公に出したりして家を出ていた事もあり、一日の内の殆どの時間、夫婦のどちらかが必ず息子の傍に張り付いていた。その日も、夕食が済むまでの間は、いつもの様に夫婦そろって息子の傍で過ごしていたのだが、張福はふと、息子を見つめていた妻のうなじに何とも言えぬ色香を感じてしまい、久方振りに夫婦水入らずで過ごそうと、息子を乳母に預けて、二人で寢室に戻った。

「ちょっと待った」

一刀は、華雄の話を、そう言って遮った。

「何だ、話の途中で藪から棒に――」

華雄は話の腰を折られたのが氣に障ったのか、不機嫌そうに杯を空けた。

「いや、その張福とか言う男、かなりいい歳なのだろう？若い女の

お前に、そんな事まで喋ったのか？」

「ああ。確か、じきに五十になると言っていたな。もしかしたら罵苦の可能性もあると思って、出来るだけその時の事を詳しく話せと言ったら、堰を切った様に喋り出したぞ。随分と憔悴していた様子だったから、仕方が無い話だろう」

『人生五十年』と言う言葉が、その通りの意味であつた時代である。

年齢が五十近いともなれば、既に現代人の七十歳前後に相当すると言つていい。増してや、この時代の男の自尊心は、現代の男の比では無いのである。

赤の他人の、しかも年若い女である華雄に、五十歳近い男が夫婦のそんな情景を口にしたと言うその一点だけを見ても、張福の息子への溺愛ぶりと、それ故の憔悴の深さが窺いしれた。

「ふむ……」

一刀は、顎に手を当てて華雄の言葉に頷くと、華雄の空いた杯に酒を注いで話の続きを促した。

華雄は、少し頬を赤くしながらわざとらしい咳払いを一つすると、「まあ、久し振りだったから、それなりに盛り上がったそうだな。

寝入ったのは、深夜近くの事だったそうだ」と、言つて、話を再開した。

甲高い女の悲鳴が張福の家に響き渡つたのは、夫婦が疲れ果て、互いに抱き合つて寝入ってから暫くしての事だった。張福夫妻は跳び起きて顔を見合わせると、寝巻を羽織る時間も惜しんで、愛息の部屋に掛け込んだ。

そこには、伝承に伝え聞く通りの姿をした女怪が居て、恐怖の余り半狂乱になった乳母を足蹴あしげにしながら、愛おしそうに赤子をその胸に抱き締めていた。女怪は、駆け寄ろうとした張福に対して、耳まで裂けた口を目一杯に開け、凄まじい金切り声を上げて威嚇すると、赤子を床にそつと置いて、裸の乳房が曝け出されるのも意に介

さずに両翼を大きく広げ、羽ばたいて宙に浮いた。

夫婦がその羽ばたきで巻き起こった突風に身動きが取れずにいると、姑獲鳥は両脚の鉤爪で器用に赤子を“握り締め”、開け放たれた窓から夜空へと飛び去った。

「と、まあ、こう言った事だったらしい」

華雄はそう言って杯を唇に当て、今度は飲み干そうとはせず、唇を湿らせただけで盆に戻した。すると屋敷の奥から、華雄の話が終わるのを待っていた様に――《薄緑はくりよく》が現れた。その手には、新たな瓶子と行燈あんどんの種火の乗った盆を携えている。

華雄がふと気が付いて空を見遣ると、空には藍色が広がり始め、太陽は既に半分以上も落ちていた。

「む、随分と日が短くなったものだな。明るい内に暇いとせするつもりだったのだが――まあ良い。どうだ、明日、一緒にその件の村まで往く気あるか？」

「うむ。気になる事が幾つかあるしな。往っても良い」

「気になる事？」

「まあ、それは明日の道中にでもゆっくり話すさ。それより、早い時間に出立するなら、泊ってゆけ」

華雄は、一刀のその言葉を聞くなり顔を真っ赤にして後ずった。

「きつ、貴様、まさか――！――！！」

「違う！俺はこの街の地理を殆ど知らんから、一緒に出た方が確かだと思っただけだ！」

「―――本当だろうな？」

一刀は、疑い深げな視線を送り続ける華雄を見遣って、呆れた様に溜め息を吐いた。

「お前な、そんなに警戒する位なら、最初から一人で、しかも酒なんか土産に持って来なけりゃ良からう？」

「―――ハッ、しまった！？」

そんなやりとりの後、結局、一刀の屋敷に泊まる事にした華雄は、せがまれるままに一刀が不在の間の蜀の人々思い出話を語りながら、

したたかに酔った。そしてその夜、華雄は、耳まで裂けた真つ赤な口を優しげに歪めた姑獲鳥が、愛おしそうに赤子を抱き抱えている夢を見たのだった。

式

「だから、何もしていないと言っているだろう……」

一刀は馬車の中で、その日何度目かになる台詞を呟いた。華雄が朝起きてからずっと、一刀が酔い潰れた自分に何かしたのでは無いかと疑って大騒ぎしているのである。

自分が持つて来た分ばかりか、一刀が買い置きしていた物も含めて二升近くの酒を呑んで翌朝にはけろりとしているのは流石と言えるが、この騒ぎには一刀も少々辟易オンドルとしていた。華雄が温床で寝入ってしまったので、一刀が抱えて寝台まで運んだのだが、どうやらそれが華雄の不信を招いてしまったらしい。

「『大陸一の種馬』が、女を寝台まで運んでおいて黙って帰る筈がない」と言うのが華雄の言い分であり、それはまったく以てお説御せつご尤もであったが、実際に何もしていないのだからしょうがない。

「そんなに信用出来んのなら、湯浴みの時にでも確かめてみる……まだ、“証”は散っておらん筈だぞ？」

一刀がそう言って苦笑いをする、華雄の顔が見る見る赤くなっ

た。

「きつ、貴様、どうして私が生娘だなどと思うか!!」

「今、自分で認めた様なものではないか。それに華雄、声が大きいぞ——」

「むう……」

一刀が、馬車の外の御者をが居る辺りを指差して窘めたので、華雄は渋々と口を閉じた。

この馬車が、如何に要人警護の為に特注された逸品でも、戦場で鍛え上げた華雄の怒声を完全に遮れる程の防音性能は無い。

「馬鹿にしておって……」

「馬鹿になど、していない」

「しただろう。どうせ、男も知らぬ小娘と――」

「人の価値は、そんな事では決まらんさ」

一刀は、ふて腐れて視線を逸らした華雄を優しげに見遣った。

「肌を重ねる事は、確かに生き物が成熟する過程で重要なものだ。しかし、人間はそれに、単なる子孫を残す為の生理的な行為以上の意味合いを持たせた。何だか分かるか？」

「いや……」

「『愛情表現』だよ。人間は肌を許し合う事に、相手に対する愛情と信頼を示す為の行為としての意味を持たせたんだ。その身に子を宿す事になる女は、特にな。それが単なる生殖行為である他の動物達を見てみる。雄は精を放つ事が出来る様になって直ぐ、雌は子を成せる様になって直ぐ、当たり前前の様に繁殖期に異性を受け入れる」

「どうも、お前の話は難しいな……。そうやって、私を煙に巻こうとしているのではないか？」

華雄そう言って、頭を抱えた。

兎も角、怒りは収まった様である。

「そんな事はない。つまり、人間と言う生き物にとっては、肌を許す事と子を成す事は、同じ様でいて微妙に意味が違うと言う事さ。だから、異性の肌を知らない事が、即ち未熟と言う事ではない。お前がたまたま、そう言う男にまだ会っていないだけさ」

一刀は言い終わってしまうと、唸る華雄から視線を外し、馬車の窓を開けて煙草に火を点けた。

「最も、だからこそ厄介なものなんだがな――」

「何と言ったんだ？」

一刀のどこか憂いを含んだ呟きに、華雄は頭を抱えていた手を離して尋ねた。

「姑獲鳥の話さ」

「おお。そう言えば昨夜、気になる事があるとか言っていたな。一体、それは何なのだ？」

「うむ。華雄、お前は、荊州に伝わる姑獲鳥の話を何処まで知っている？」

一刀の問いに、華雄は顎に手を当てて、考えながら口を開いた。

「まず、『人間の赤子を攫って育てる』事。それから、『羽毛を脱いで、人の様な姿になれる』事。あとは、『雌しかない』、と言う事だったかな」

華雄がそう言っおおよそて一刀を見返すと、一刀は小さく頷いた。

「大凡は合っている。だが、抜けているところがあるな」

「そうなのか？」

「ああ。良いか、本来、姑獲鳥が攫うのは“女児だけ”なんだ」

「本当か！？」

一刀は、素っ頓狂な声を出して驚く華雄に微笑みを返した。

「よく考えてみる。『子を攫って育てる』、つまり、やり方はどうあれ、『養子にする』と言う事だろう？普通、養子を取るのは何の為だ？」

「それは勿論、後を継がせる為だろう」

「そうだな。では、“雄”の姑獲鳥が居ると言う話はあったか？」

「お前、やはり私を馬鹿にしているのだろう？姑獲鳥には『雌しかない』と今——あ！」

一刀は、華雄が自分の言わんとしている事に気が付いたのを見て取り、満足そうに頷いた。

「そう。姑獲鳥に雌しかないのは、『女児しか攫わない』からだ。最もそれが、『男が育てられない』からなのか、そもそも姑獲鳥が

『そう言う在様ありようのモノ』だからなのかまでは、解らんがね。まあ、おそろく半々と言ったところだろうが」

「しかし、張福は『息子を攫われた』……………」

「そうだ。その一点だけを考えれば、張福の所に現れたのは『姑獲鳥ではない』と言う事になる。なにせ、姑獲鳥の定義から外れているんだからな」

一刀はそう言って、殆どフィルターだけになった煙草を携帯灰皿に押し込んだ。

「どう言う事なのだ、一体……。一刀、お前には解っているのか？」
「解っているとも言えるし、解っていないとも言えるな」

「お前はまた、そうやってはぐらかす——」

「はぐらかしてなどいない。言葉通りの意味さ。つまり、姑獲鳥が本来どんなモノなのかは解っているが、張福の子を攫った姑獲鳥がどんなモノなのかは、まだ解らんと言う事だ」

「解らん……。姑獲鳥は姑獲鳥ではないのか？」

「その話は、今夜にでもするとしよう。村が見えて来たぞ」

一刀は窓の外を顎で示してそう言うと、それきり着物の裾の中で両手を組んだまま、黙って目を閉じ、馬車が止まるまで一言も喋らなかった。

参

「ようこそおいで下さいました」

村の最も奥まった所にある屋敷の前で、そう言って馬車から降りた二人を出迎えたのは、大柄な壮年の男であった。

華雄は男に向かって一刀を、「私の旧知で、高名な道士ほくとうの北刀殿

だ」と紹介した。

一刀が馬車から降りる前に、華雄に自分の素情を誤魔化すように言い含めていた為である。一刀は、「北刀です」と自己紹介をしながら、もう少し捻った名は考えつかなかったのかと、内心で華雄に苦笑した。

男は「張福です」と一刀に挨拶をして、繁々とその姿を眺めた。

肌寒かった事もあり、今日の一刀は、昨日と同じ白い着流しの下に黒いズボンを履き、足元は皮を鞣して作られた半長靴と言う出で立ちであった。『道士』と言われれば、確かに道士然とした服装に見えるかもしれない。

「華雄將軍、北刀様。態々足をお運び頂き、真にありがとう存じます。何分、事が事ですので、として良いやら皆目見当も付かず、途方に暮れておりましたところで————」

張福はそう言って両手を眼前で組んで、深く頭を下げた。

白いものが混じった豊かな頭髮と、細長く蓄えられた髭。地味だが品の良い、藍色の袍^{パオ}。農作業で培われたのであろう引き締まった立派な体軀に、浅黒く日焼けした肌。深い憔悴の為に眼は落ち窪み、肌は艶を失ってはいるものの、この時代の五十男にしたら、かなり若々しい部類に入るだろう。張福は、妻が具合を悪くして臥せており、出迎えに來れない旨を詫びて、二人を屋敷に誘^{いざな}った。

広い客間に通され、籐で編まれた立派な椅子を勧められた一刀と華雄は、茶が出て来るのを待つ間に、改めて張福の話聞く事にした。

「ところで、張福殿。その姑獲鳥の詳しい有様^{ありさま}などは、どの程度覚えていらっしゃる^{ぼぼ}ですか？」

華雄から伝え聞いたのと粗^{はぼ}同じ話を張福から聞き終えた後、一刀は、労わる様な口調で張福に尋ねた。

「有様、ですか」

「ええ。華雄將軍のお話では、口が耳まで裂けていた事と、上半身は裸で、足に鉤爪があったと言う事くらいしか解りませんでしたの

で」

一刀の言葉を受けた張福は、思い出したくもないと言う想いと、思い出さなければならぬと言う想いがせめぎ合っているのか、顎を引き、腕を組んで、複雑な表情で暫く黙考した。

張福は、それから三分程も押し黙ったあと、重い口を開いた。

「そうですね————」。目は赤く光っていて、髪は黒く波立って胸まで伸び、振り乱れて半ば顔を覆ってありました。羽の色は濃い緑で縁は漆黒、両の乳房は豊かで、臍の下辺りまで青白く透き通る様な肌が露わになっており、股から太腿までが、今度は赫い羽で覆われておりました。膝から下はまるきり鳥の足で、尻の上辺りに、大きな尾羽があったと思います」

張福は、苦い薬を呑み下した様な顔で一息にそう言うと、脱力して俯いた。

「赫い羽————」。張福殿、疑う訳ではないのですが、その姑獲鳥の下半身の羽の色は、真に赫かったのですね？」

一刀が真剣な面持ちで尋ねると、張福は頭が重くて堪らないとも言う様にのろのろと顔を上げ、小さく頷いた。

「はい。煤の混ざった炎のような、黒味がかった禍々しい赫でしたので、よく覚えております」

一刀が暫くの間考え込み、再び口を開こうとしたところで、大きな扉が静かに開き、小柄な女が茶器を乗せた盆を持って客間に入ってきた。歳は三十絡み位だろうか。侍女らしく、長い髪を後ろに引っ詰め、大きな団子にして布で包んでいる。

取り分け美しいと言う訳では無いが、目鼻立ちの整った顔で、少し垂れ気味の優しい眼の下には大きな隈を作っていた。女は小さく「失礼します」と言うと、卓に盆を置いて、手際良く一刀と華雄の碗に茶を注ぎ、最後に張福の碗にも茶を注いでから、一礼して部屋を出て行った。

「あの御婦人も、随分と御令息の事を気に病んでおられるようだな」

華雄がそう言うのと、張福は悲しそうな眼をして答えた。

「あれは、麗儀れいぎと言う名でしてね。私が一人っ子だったもので、数えで十二の頃に我が家に奉公に来てから、実の妹の様に可愛がって来たのです。妻との相性も良く、娘たちも姉の様に慕っております。あれも、男の子を“流した”事がありましたので、息子の事を随分可愛がってくれておりましたから……」

「そうでしたか——。では、麗儀さんの御亭主もこの家で働いていらっしやるのですか？」

一刀の問いに、張福は小さく頷いた。

「ええ、以前は……。あれの夫は働き者の、気の良い好漢なこうどでした。麗儀の腹に子が宿ったと聞いた時も、私も妻も喜んで仲人に立ち、祝言を上げさせたのです。生まれつき脚が悪く、少し右足を引きずっておりましてね。そのお陰で兵役に取られる事も無く、返って良かったと喜んでいた矢先、流行り病であっさりと……」

張福はそう言って首を振り、静かに茶を啜った。

「では最後に、大変失礼な事をお聞きます。答えづらいでしょうが、重要な事ですので、どうかお答え下さい」

一刀はそう言って、張福を見つめた。

「はい」

張福は緊張した面持ちでそう言うのと、姿勢を正す。

「失礼ですが、張福殿は過去、奥方以外のどこぞの女性に懸想けそうなされた事は御座いませんか？或いは、御子を産ませた事が？」

「は？」

張福は暫くの間、呆けた様に一刀を見ていたが、一刀が至極真面目に尋ねている事をその表情から察して、ゆっくりと首を振った。

「いえ、特定の女を囲った様な事はありませんし、子を産ませた事も——多分、ありません」

「多分？」

「その、お恥ずかしい話なのですが……」

張福はそう言つて、訝しげな顔で自分を見ている華雄の方をちらりと見た。

「ああ……、“そういう事”ですか」

一刀は張福の様子を見て、その言わんとしている事を察し、微笑みながら頷いた。

「はい。と、言ひましても、随分と若い頃、都会に出掛けた時に何度かだけです……。その後の事には確信は持てませんから……」

「張福殿は、随分と生真面目に物事を考えられる方なのですね。その辺りの事は、除外して構いませんよ」

「だから、どう言う事なのだ！」

男二人が勝手に得心してしまった為に置いてけぼりになっていた華雄が、ドン、と卓を叩いて文句を言った。一刀が、『言つても良いのか』と言う眼で張福を見ると、張福は諦めた様に頷く。

「つまりだ——ゲフンゲフン。つまりですね、將軍。張福殿は、若い頃に妓楼きろうでお遊びなられた時の事を仰つておいでなのですよ」

一刀がそう言つと、華雄は顎に手を当てて暫く考えてから、「ああ！」と言つて頷いた。

「何だ、それならそうと言えば良からう。紛らわしい」

「は？ いえ、しかし——ご不快でしょう？」

張福が氣遣わしげにそう尋ねると、華雄は「ふん」と鼻を鳴らした。

「私は軍人だぞ。四六時中ずっと男に囲まれていれば、そんな話は散々聞いている。つまらん氣遣いは無用だ」

「張福殿——」。華雄將軍は、大変に『剛毅』なお人柄であられま
すから……」

一刀は、込み上げて来る笑いに堪えながら、両手を腰に当てて胸を張る華雄を茫然と見つめる張福にそう言つた。

「はあ、左様で……。」

張福はどうかそう答えたものの、未だ華雄を珍しい動物でも見る様な眼で眺めていた。

無理もない。

『牧歌的』という言葉絵に描いた様なこの村から殆ど出た事が無いであろう張福にとつて、華雄の様な女傑は、それこそ龍や麒麟と大差ない、伝え聞くだけの存在であるに違いなかった。

「で、では、張福殿。最後に、姑獲鳥が現れたと言う部屋を見せて頂けますか？」

一刀は、凄まじい努力で真面目な顔を作り直して張福に向かってそう言いながら席を立った。

四

「ここで御座います————」

一刀と華雄は、先程まで幾分か和らいでいた表情を元の沈痛な様子に戻した張福がそう言って開けた扉から、件の部屋くたんに入ると、恐ろしい事もあってそのままにしてあると言う部屋には、姑獲鳥が引き起こしたと言う怪異の跡が、生々しく残されていた。

調べ終わったら戻るからと言って張福を帰した一刀は、ぐると部屋を見渡すと、迷う様子も無く窓の傍にスタスタと歩み寄り、注意深く辺りを観察し始めた。

「むう……」

手持ち無沙汰になってしまった華雄は、そう唸ると、腰に佩いていた剣の鞘の先端で、ズタズタに引き裂かれた掛け布団を持ち上げて、そこにベットリと付いた赤黒い染みを繁々と眺めた。

「その“血”に触れるなよ」

華雄は、一刀が強い口調でそう言ったのに驚いて布団を離し、窓際から何時の間にかこちらに顔を向けている一刀を見た。

「それは、『姑獲鳥の血』だぞ。触ったり匂いを嗅いだりすれば、瘴氣あに中てられる」

一刀は張福が居なくなったので、いつもの口調に戻ってそう言った。

「どうして、これが姑獲鳥の血だと解るのだ。乳母か赤子のものかも知れんだろう？」

「臭いさ」

「臭い？」

「ああ。血に混じった瘴氣が、先程そばを通った時に強く臭ったんだ。姑獲鳥は、自分の血で夜、外に干してある子供の服に印を付け、病をもたらすと言う説がある。最も、子供が服に着いた血の瘴氣に中てられた、と言うのが本当のところだろうがな」

「む、それは知らなかったぞ。どうして教えてくれなかったんだ？」

「そちらは、今回の事に関しては余り重要じゃないと思ってな。赤ん坊は攫われたんであって、病氣にされた訳じゃないだろう？」

「むむむ……」

一刀は、華雄の文句を笑顔で一蹴すると、再び窓際の周辺の家具や棚の影を調べ始めた。

「お、あったぞ」

一刀が床に屈みながらそう言ったのは、華雄がいい加減に飽きてきて、つま先で床をカツカツと叩き始めてから暫く経った頃のことだった。

「何があったのだ!？」

華雄が“おあずけ”を解かれた犬の様な顔で近付いて行くと、一刀は、衣装棚の下の隙間に右手を突っ込んでいた。

「これだ」

隙間から出された一刀の手には、深緑色に黒い縁取りの、大きな

一本の羽が摘ままれていた。

「おい、一刀。これはまさか——」

「そのまさか、さ。これは、『姑獲鳥の羽』だよ」

一刀は事もなげにそう言うのと、その羽を顔に近づけて、鼻をひくつかせた。

「おい、瘴気は大丈夫なのか!？」

一刀は、心配そうにそう言う華雄に向かって微笑んだ。

「俺は、少し耐性があるからな。しかし、妙な——」

「妙だと?」

「ああ。これはやはり……」

一刀は、じっと羽を見つめて独り言の様にそう呟くと、懷に手を入れて何かを取り出した。

「む? 蝶か、それは?」

華雄が眉間に皺を寄せて訝しげに尋ねると、一刀は小さく頷いた。それは、切り紙で作られた蝶だった。

一刀はそれを縦に折ると、その折り目に沿って舌を這せて濡らし、慎重に裂いた。続いて、二つになった蝶を両手で挟み、目を閉じて唇を寄せ、何事かを呟く。

一刀が再び手を開いた時、華雄は思わず「おお!」と声を上げた。一刀の右の掌に“片羽”の揚羽蝶が現れ、その羽を、呼吸をする様にゆっくりと動かしながら大人しく留っていたのである。

一刀が左手で姑獲鳥の羽を近づけると、その蝶は右側の二枚の羽だけでひらひらと飛んで、姑獲鳥の羽の先に静かに留った。

「これも、お前の言う式神と言うやつなのか?」

「その様なモノだが、式神ほど“強く”はない」

一刀は、興味深げに片羽の蝶を見つめる華雄にそう答えると、「頼んだぞ」と言って、姑獲鳥の羽を軽く振った。すると、片羽の蝶はひらりと宙に舞い上がり、ふわふわと飛んで、窓の外の空に消えた。

「あれに、何を命じたんだ？」

「救えるかも知れない」

「は？」

「此処に来るまでは、手遅れかと思っていたんだが……」

「もしかして、赤子の事を言っているのか？」

一刀は、蝶の飛んで行った空に向けていた視線を華雄の顔に戻して、静かに頷いた。

「助けられるのか、赤子は！？」

「まだ解らん。だが、少なくとも、赤子はまだ、助けられる可能性がある……。いずれにしても、今日は長い夜になるぞ」

一刀はそう言って、蝶が飛び去って行った茜色の空を見上げた。

姑獲鳥 第二章（後書き）

今回のお話、いかがでしたか。

相変わらず、恋姫SSにあるまじき、暗い感じですね。すみません

wwww

でもまあ、折角の“外伝”ですので、これはこれで、本編とは別の視点で楽しんで頂ければと思います。

では、また次回、お会いしましょう

姑獲鳥 第三章（前書き）

いよいよ姑獲鳥の住処へと向かう一刀達。

そこには、哀しい女の業が起こしてしまった悲劇が待ち受けていたのだった――。

では、どうぞ！

姑獲鳥 第三章

壺

夕刻、一刀は、張福が用意してくれた部屋の窓際で、今や、すっかり群青が濃くなった空を眺めながら、紫煙を燻らせていた。夜露が降り始めたせい、庭に植えられた金木犀の甘い花の香が、昼間よりも濃密になって、窓際から部屋の中に漂って来ている。

「なあ、一刀」

それまで、黙々と自分の愛用する戦斧、『金剛爆斧こんごうばくふを布で磨いていた華雄が、思い出した様に一刀に顔を向けた。

「うん？」

「そう言えばお前、馬車の中で妙な事を言っていたな。確か、本来の姑獲鳥がどうか——」

「ああ、その事か」

一刀は、縦半分の蝶の切り紙を備え付けの卓の上で弄びながら、群青色の空から視線を逸らす事なく言った。

「おう、その事だ。あれは、未だによく解らんのだが……」

「うむ。では、出来るだけ噛み砕いて話してみるか」

一刀は、ゆるりと華雄の顔を見て言った。

「良いか、華雄。大凡、この世に存在する鬼だの妖異あやかしだのと言ったモノは、人の心が生み出したものなんだ」

「う、うむ」

「つまり、姑獲鳥ならば、『子供が突然居なくなる』という出来事を、人々が“姑獲鳥”と言う名の妖異の仕業だと考え、人が、かくあれかしとその姿を想像する事で初めて、『姑獲鳥と言う妖異がこの世に存在する事』になる。解るか？」

「全く解らん！」

一刀は、何故か腰に手を当て、誇らしげに胸を張る華雄を見て、
「だよなあ」と呟き、気を取り直す様に咳払いをして、再び口を開いた。

「つまりな、俺が言った、“本来”の姑獲鳥というのは、『人々に求められた姑獲鳥の在り方』と言う事だよ」

「おいおい、一刀。どうして人が、大事な子供を攫う様な妖異を求めたりすると言うんだ。おかしいだろう？」

至極当然、といった様子でそう言う華雄に、一刀は小さく微笑んだ。

「そうだな。お前の言う事は、まったく正しいよ。じゃあ、お前、昼間の“男と女”の話は覚えてるか？」

「お、おう。覚えているが、それがどうした？」

「人間は、男と女が契りを結ぶ事を、“愛情表現”として、互いに対する信頼の証にした。しかし“結果”は、他の生き物たちと何ら変わらない。つまり、お互いに愛し合っているように、単なる生殖行為だろうが、結局たどり着くのは、“子を成す”と言う事な訳だ」
「ううむ。確かに、それはそうだ……。だが、それと姑獲鳥が人に望まれていると言う事と、どう関係があるんだ？」

「それが、あるのさ。まあ、最後まで聞けよ——これが獣ならば、親子の関係はもっと乾いている。何故なら、ごく一部の例外を除いた獣たちにとっては、子供はただ、『自分の血を残す為の器』ではないからだ」

一刀はそう言って、新しい煙草を取り出し、吸い差しから直接火

を移して、再び話し出した。

「例えば獅子など、一人で獲物を狩る事が出来る様になった若い雄は、直ぐに群れを追い出されるし、新しく群れを率いる事になった雄は、自分の前にいた雄の血を引く子供をみんな殺してしまう。しかし、母親たちは、それに抗ったりしない。何故なら、父親が誰であれ、『自分の血を残せる』と言う事は、既に約束されているんだからな」

「成程な……。しかし、何だか悲しい話だなあ、一刀」

「それはお前が、“人間”だから、そう感じるのさ。つまり華雄、お前が獣たちに感じたその気持ちこそが、姑獲鳥を生んだんだよ」

「うう、やっぱりよく解らん……」

「人間は、男と女が肌を重ねる事に、互いへの“愛情表現”と言う性質を持たせた。それはつまり、その成果である子供は、人間の親、特に、十月十日の間、腹に子を宿す母親にとっては、単なる『血脈の受け皿』以上の存在になったと言うことさ——だがな、華雄。都会なら兎も角、貧しい小さな村などでは、いかに両親が愛し合った結果に産まれた子供でも、その全てを育てる事は出来んだろう？」

「そうだな。未だに、『口減らし』をしている村もあると言うしな……」

どこか苦しい口調でそう呟いた華雄に同意して、一刀も眉を寄せて頷いた。

「ああ。産まれた赤子を抱く事すら許されなかった母親たちの苦しみは、言葉に尽くせぬ凄まじいものだったろう。だからある時、荊州のどこかで、子供を取り上げられた母親の、その嘆き様を哀れんだ誰かがこう言ったのさ。『お前の子は、女の顔をした鳥の化け物が攫って行ってしまった。だが、その化け物は、子供を喰わずに育てるらしいぞ』とな……。つまり、『本来の姑獲鳥』と言うのは、ある哀しい母親への免罪符として生まれ、同じ境遇の女たちを慰める為に喧伝けんでんされた、“噂”なのだろうさ」

「ちょっと待て、一刀。じゃあ、姑獲鳥と言う怪異は、本当は存在しないと云うのか？」

「いや、そうは言わない。人の情念が形を成すと言うのは、ままある事だからな。実際に、荊州の山奥にそう言う怪異が誕生していたとしても、不思議はない」

「何だ、益々こんがらがって来たな……」

華雄は、手に持っていた金剛爆斧を寝台に横たえて、ぼりぼりと頭を掻いた。

「俺が言っているのは、今現在“居るか居ないか”ではなく、その“成り立ち”だよ。何せ、どうして姑獲鳥が女兒を喰らうのではなく、育てるのは、どんな文献にも詳しい理由が載っていないんだ」「おい。お前はさっき、姑獲鳥が女兒を育てるのは後を継がせるのだと言ったではないか」

「確かに言った。だがそれはあくまでも、理詰めで考えれば、と言う話だ。でなければ、ただ子供を攫ってゆく事の説明が付かないだろう？」

「むう……。つまりお前は、姑獲鳥が子を攫う事に、実は理由など無いと言っているのか？」

「そうさ。母親たちにしてみれば、どんな形であれ、死ぬ筈だった我が子が、何処かで生きていと言う一事こそが大事なんだからな。女兒を攫うと言うのも、短い期間で労働力になる男児よりも、女兒の方が、口減らしの対象になり易いからだろうな」

「では、お前の言う『張福の子を攫った姑獲鳥』と言うのは……」
一刀は、更に何かを言いかけた華雄に対して、人差し指を口に当ててそれを制し、ちらりと扉に向かって目配せをした。

華雄が頷いて耳をすますと、はたして、こちらに向かって廊下を歩いて来る足音が聴こえた。二人が、暫く黙って扉を見つめていると、足音は扉の前で止まり、女の声が投げかけられた。

「華雄將軍様、北刀様。主、張福の命にて、酒さけなどお持ち致しました。入ってもよろしゅう御座いますか？」

華雄は、眼を合わせた一刀が頷いたのを見て、「おう、今、開ける」と言って腰を浮かせた。

式

扉の前に居たのは、昼間に茶を入れてくれた、小柄な侍女だった。侍女は、小さな声で華雄に礼を言って入室し、一刀の前の卓に、持っていた盆を置いた。

「へえ、茸ですか」

「はい。この辺りでは季節になりますと、茸を火で炙ったものに、同じく炙って焦げ目を付けた醬を添えて、肴に致します」

物珍しそうにそう言った一刀に、侍女が静かに言った。

「ありがとうございます。この茸、あなたが採った物なんですか？

ええと、麗儀殿？」

一刀は、手早く瓶子と杯を配している侍女に向かって、優しく笑いかけた。

「はい。左様で御座いますが……でも、どうして私の名を？」

「昼間、張福殿が教えて下さいました。しかし、良かった」

胸を撫で下ろした様子の一刀に、小柄な侍女、麗儀は首を傾げた。

「はあ。何が、でしょう？」

「私も、疲れている時などにたまにやってしまうのですが、話に上った人物の真名を知らない相手に、思わず真名を用いて話をしてしまう事がありますので……。張福殿は大変にお疲れのご様子でしたから、無意識の内にあなたを真名で呼んで私たちに紹介してしまっただけでは、と、ふと思ったのです」

麗儀は、一刀に釣られて控え目に微笑みながら、小さく首を振っ

た。

「それで御座いましたか。御安心下さい。私の真名は“萩”^{はぎ}と申しますから」

一刀は頷き、ふと真面目な表情になって、再び麗儀に話しかけた。
「あなたも、張福殿の御令息を随分とお可愛がりになられていたとか。さぞお辛いでしょう」

「はい……。旦那様からお聞きになったやも知れませんが、私も男の子を“流した”事がありましたので。恐れ多い話ではありますが、坊ちやまの事は、息子の生まれ変わりの様に思えまして——」

「さもあるうなあ……」

思わず溢れて来た涙を服の袖で拭う麗儀を見ながら、瞳を潤ませた華雄が呟く様に言う、麗儀は袖で眼を押さえながら頷いた。

「はい。旦那様と奥さまも、そんな私の気持ちを察し下さり、よく坊ちやまを抱かせて下さいました……」

「麗儀殿。あなたも、この屋敷にお住まいなのですよね。姑獲鳥が現れたという夜、何か気付いたり見たりした事はありませんでしたか？どんな些細な事でも構わないのですが」

優しく尋ねる一刀に、麗儀は無念そうに首を振った。

「残念ながら、何も……。私の部屋は、ぼっちゃまのお休みになっていた部屋とは反対の庭にある、離れで御座いますので。お恥ずかしい事に、旦那様が朝方に私を起こしに来て下さるまで、ぐっすり寝入っております……」

麗儀は、吐き出す様にそう言うと、形の良い唇を、白くなる程に強く引き結んだ。その無念が、滲み出ている様な表情である。

「そうですか——どうも、辛い事をお聞きして、相済みません」
一刀は、そう言いながら立ち上がって、麗儀の肩に手を置きながら、扉の方へ誘^{いびな}った。

扉を開けて麗儀を外に送り出そうとした、その時、一刀は、思いついたように麗儀に尋ねた。

「そうだ、麗儀殿。茸を取りに山に入られるのは、大体、何日置き位です？」

「はあ、五日に一度位の割合になりますでしょうか。その茸は、坊ちやまが攫われる前の日に取って来た物です」

「その時、山で、何か妙なものを見たり、聞いたりはしませんでしたか？」

麗儀は眉を寄せ、暫く考え込んでいたが、一瞬、頭痛にでも襲われた様に顔を歪めて、首を振った。

「いいえ。特には――。お役に立てず、申し訳御座いません」

「いえ。こちらこそ、辛い事を思い出させてしまつて」

「北刀様」

麗儀は、扉を出るなり振り向き、一刀に対して深く頭を下げた。

「坊ちやまを、どうか宜しくお願い致します」

「最善を尽くします」

一刀はそう返事を返して、廊下を引き返してゆく麗儀の背中を暫く見つめたあと、眉間に皺を寄せて振り向き、茸の載せられた卓に、ゆっくりと引き返してきた。

「やはり、随分と辛いのだろうな。麗儀殿は」

華雄が溜め息混じりにそう言うと、一刀は上の空で「ああ」と返事をし、元の椅子に腰を下ろした。

「何だ、一刀。一体どうした、妙な顔をして？」

「うむ。これはやはり――」

一刀はそう言ったきり、暫くの間、何やら考え込んでいたが、やがて「ほう」と息を吐いて首を振ると、華雄に向かって微笑んだ。

「さあ、折角だから、暖かい内に頂こうか」

「お、見つけたか！」

一刀が突然その声を上げたのは、焼き茸を肴に二人が酒を呑み始めてから、半刻（約一時間）程した頃の事だった。

「な、何だ、藪から棒に！」

チビリチビリと杯を舐めていた華雄が、驚いて一刀を見た。

「これを見ろ」

華雄が、素直に一刀の指が差す場所を見遣ると、そこには紙で出来た蝶に片半分が置いてあった。

しかし、それだけではない。

「おお！！」

華雄が見ている内に、それは徐徐に厚みを持ち、色を持って、片羽の揚羽蝶へと姿を変えてゆく。

やがて、揚羽蝶はゆっくりと羽を動かし始め、ひらひらと宙を舞い、窓の外へ飛んで行った。

「さあ、往くぞ。華雄」

一刀はそう言うと、素早く椅子から立ち上がった。――それから暫くして、一刀、華雄、張福の三人は、小振りな松明の灯り一つを頼りに、夜の山の中を歩いていった。

まさか黙って出て行く訳にもいかなかったので、張福に出掛ける旨を告げたところ、『どうしても』と泣き付かれてしまったのである。

「暗う御座いますね……」

張福はそう言って、腰布に突っ込んで来た鉦の柄を握りながら、唾を飲んだ。

無理もない。月明かりさえ入り込まない、鬱蒼とした山林の中である。

松明の灯りの外は、真の闇であった。

「辛抱なさいませ。今から引き返したのでは、間に合わなくなりま

す」

一刀は、一定の距離を保って自分達の前を飛んでゆく片羽の揚羽蝶から眼を離さずに、張福にそう言った。不思議な事に、揚羽蝶は闇の中で薄ぼんやりと、まるで、その羽に燐でも付いている様に、青白く光っている。

張福は、しんがり殿を務める華雄に、「さあ」と優しく促され、それに頷いて、再び道なき道を歩き出した。

それから、どれ程の距離を歩いたのか。先頭を歩いていた一刀が不意に立ち止まり、顔を半分程後ろに向けて、

「着いたようです」

と、二人に言った。

華雄と張福が、一刀に並んで前を見ると、山肌にポツカリと口を開けている洞窟の前で、二匹の片羽の蝶が、互いにじゃれあう様にひらひらと舞っている。一刀が近づいて行って手を差し伸べると、蝶たちは空中でピタリと一つになり、一刀の掌に舞い降りた。

華雄が一刀の掌を覗き込むと、蝶は、始めて見た時と同じ、一枚の切り紙になっていた。一刀は、「帰りも頼むよ」と呟いて、蝶の切り紙を懷に仕舞い、松明を洞窟に向かって掲げた。

「でかいな—————」

その洞窟は、高さ約十丈、幅約六丈程で、大人でもゆったりと歩ける程の、かなり大きなものだった。華雄の呟きに、張福が頷く。

「この辺りには昔、山小屋代わりに使われていた洞窟が幾つもあったと、父から聞いた事がございます。この洞窟も、或いはその一つかも知れません」

「間違いないでしょう。人工的に切り掘られた跡があります」

一刀はそう言って、洞窟の壁に手を這わせた。その断面は、刃物で削り取られた様に滑らかである。

「北刀様。本当に、ここに息子が、けんじょう兼常が居るのでしょうか？」

張福が、緊張と期待を込めた声で一刀に尋ねると、一刀は小さく

顎を引いた。

「しかし、姑獲鳥が居るかも知れんだろう。素直に入って大丈夫なのか？」

「大丈夫。今は居ないよ」

一刀は、何故か憂いを感じさせる微笑を浮かべて華雄にそう断言すると、松明をかざして洞窟の中に歩を進めた。

どこからか、水滴の落ちる、

ぴちゅん、

ぴちゅん、

という音が、絶え間なく三人の耳に届いて来る。

山肌から吸われた水が、この洞窟の天井まで降りて来て、床に滴っている為だ。

三人が暫く無言で歩いていると、不意に、今まで身体に纏わり付く様に感じた空気が、ふわりと軽くなった。奥行きのある、広い空間に出たからである。

「これは凄いな……」

華雄はそう言って顔を上げ、松明がぼんやりと照らすその空間の上方を見遣った。今までも十分な高さだったが、この空間はその倍、凡そ、二十丈はあるのではないだろうか。

天井から氷柱状になって垂れ下がっている大小の突起は、その先端から、松明の火で光る無数の水滴を滴らせ、まるで旋律を奏でる様に、それを床に落としている。

ここが怪異の住処であると知らなければ、いつまで見ても飽きないであろう程に、その光景は幻想的であった。

「兼常!!」

張福の叫び声が、うっとり洞窟の天井を眺めていた華雄の思考を遮った。華雄が視線を戻すと、ちょっとした大広間程の広さのある、この空洞の奥に向かって駆けだして行く、張福の後ろ姿が見えた。

一刀の白い着物が、その後をゆったりとした足取りで追っている。華雄は、慌てて一刀の横まで追いつくと、その横顔を見遣った。

松明の灯りの加減で男らしい骨格が見え辛いからか、その横顔はまるで、女のように滑らかだ。

「赤子は、無事かな？」

華雄の、どこか戸惑った様なその質問に一刀が口を開きかけた時、張福が、悲鳴の様な声で二人の名を呼んだ。

四

「こ、これは―――！」

張福の元に駆け付けた華雄は、その腕に抱かれた赤子を、顔を背けるのも忘れて凝視した。

薄汚れた布に包まれた兼常は、その小さな身体中に、膿そろうを含んだ瘡そうの様なものを張り付かせて、泣く事すら出来ない程に衰弱していたのである。松明を近づけて見れば、その瘡は、まるで別の生き物の様に醜く蠢蠢いていた。

「北刀様……！！！」

一刀は、張福の縋すがる様な眼差しを受け止めて小さく頷くと、自分の松明を華雄に渡し、兼常を張福の腕から優しく取り上げた。

一刀はまず、兼常の首に、労わる様な手つきで人差し指と中指を当てて脈を確かめると、続いて、布の中で苦しげに悶える小さな身体の数力所に、同じ様に触れてから顔を上げた。

「大丈夫。陰気を直接吸わされてかなり衰弱していますが、然るべき処置をすれば、まだ間に合います」と言って、張福に微笑んだ。

「本当ですか！？良かった、本当に良かった……………」

一刀は懷から、複雑な文様が書かれた長方形の紙を取り出して唇を寄せ、何事かを呟いて、それをそつと兼常を包んでいる布の中に差し入れると、脱力して膝をついていた張福の肩に手を置いた。

「さあ、まだ、一刻を争う事態である事に変わりはありません。急いでこの子を……………」

一刀は、そこで言いかけていた言葉を止め、小さく舌打ちをして、来る時に通つて来た通路を見遣った。

「……感づいたか。このまま帰らせてくれていれば、少しは穩便に出来たんだがな」

「かず……………北刀。まさか……………」

「ああ、“来る”ぞ。張福殿、この子を抱いて、私と華雄將軍の後ろへ。將軍、二人を頼みます」

華雄が、金剛爆斧を構えて一刀の言葉に頷くのと、瘴氣を含んだ、獣臭い風が吹き込んで来たのとは、ほぼ同時であつた。三人が息を殺して通路を見つめていると、やがて、禍々しい二つの光が闇に浮かび上がった。

続いて、槍の石突で石を叩いたような、カッン、カッン、と言う鋭い足音が次第に大きくなり、ソレは、松明の灯りの元に、ゆつくりとその姿を現した。

身の丈は、凡そ一丈余りもあろうか。

緩やかに波打った黒髪で半ば覆れ、爛欄と輝く双眸だけが、その漆黒の滝の中からこちらを見据えている恐ろしげな顔。深緑色の羽毛から見える、艶めかしい乳房となだらかな腹部は、白粉を叩いた様に白い。その下半身には、張福が言つた通りの黒味がかった羽毛が太腿まみつしりと生え、膝から下の関節は、人のそれとは逆に折れ曲がつて、猛禽類その物の鋭い爪を持った、鳥の脚へと続いていた。

「恨めしいなあ。一度ならず二度までも、我が子を取り上げようと

する言うんのかよ」

その怪物、姑獲鳥は、耳まで裂けた大きな口から、緑色の炎をちらちらと吐きながら、地の底から響いて来る様な不気味な声で、三人を見つめながらそう言った。

「これは人の、それも男の子ぞ。陰に属する女の子ならまだしも、陽たる男の子では、お前の乳では育たぬであろう。親の元に還してやらねば、死んでしまうよ」

一刀は、まるで諭す様に、自分を睨む女怪に向かってそう言った。「道士風情に何が解るかよ。それは我が子ぞ、うぬ等などには渡さぬわ!」

姑獲鳥が一刀に向かって、その毒々しい色の翼を広げた瞬間、一刀の斜め後ろで両脚に力を溜めていた華雄が、疾風の如く姑獲鳥に向かって駆け出した。

裂帛の気合と共に打ち下ろした金剛爆斧が、姑獲鳥の肩を袈斬りに両断しようとした、その時、

「動くな、“華雄”」

姑獲鳥は、大きな口を歪めて、確かに華雄の名を呼んだ。

「何!?!う、ぐっ!?!」

次の瞬間、華雄は、金剛爆斧を姑獲鳥の肩の手前で止めたまま、ぴたりとその動きを止めた。

華雄は、どうにかして止まった身体を動かそうとするのだが、まるで強い力で押さえ付けられた様に動かない。声すらも、喉から先に出す事が出来なかった。

「動くな、北刀。動くな、張福」

姑獲鳥は、全身の毛が太くなる様な恐ろしい嗤いを上げながら、残った二人の名を呼んだ。

「どうし、て!?!」

華雄の耳に、後ろでそう言っている張福の声が聴こえた。気配から察するに、やはり華雄と同様、動きを封じられたらしい。

姑獲鳥は、「うぬ等は、後でゆっくり喰ろうてくれよう」と言つて華雄と一刀を睨むと、カツ、カツ、という音を立てながら、張福に、いや、正確には、その腕に抱かれている兼常に向かつて、歩き出した。

「まあ、そう慌てるなよ」

姑獲鳥が、後方から聴こえたその声に驚いて振り返ると、白衣の道士が“振り向いて”、悠然と微笑んでいた。

「おのれ、謀^{たばか}ったなあ。北刀！」

一刀は、微笑んだだけで答えない。姑獲鳥が羽を戦慄かて一刀に飛びかかろうとした、その刹那、「動くな“萩”」一刀が静かにそう言ふと、半ば翼を広げたまま、姑獲鳥の動きが止まった。

一刀は、哀しそうに「やはりな」と呟くと、華雄の傍に歩み寄つた。一刀が額に手を当てて何事かを呟くのと同時に、ふっと華雄の身体に自由が戻る。

「一刀、これは一体!？」

「名と言うのはな、この世で最も単純で、最も強い呪^{しゅ}なのさ。お前も張福殿も、姑獲鳥に呼ばれて返事をしてしまったろう。だから、奴の呪に掛けてしまったんだ」

「一刀。お前、こうなる事が分かつていて、私に名を誤魔化せと言つたのか？」

「まさか。偽りの名であっても、呼ばれて答えれば呪には掛るさ。最も、縛りその物は随分弱くなるがな」一刀は、静かにそう言つて張福の元に行き、華雄と同じ様にして金縛りを解いた。

「北刀様——。あ、あれは、あれは、萩なのですか!？」

張福は今にも泣き出しそうな顔で一刀の両の腕を握り締め、懇願する様に言つた。その眼が、『違ふと言つてくれ』と、一刀に語りかけている。

「はい——あれは、麗儀殿です。間違ひなく」
「そんな、どうして——」

「麗儀殿はよく、山に入って山菜や茸をお取になられていたとか。恐らく、その時に鬼きに憑かれてしまったのでしょう。兎に角、今は此処を出なくては」

張福が、尚も一刀に言い募ろうとしたその時、止まっていた筈の姑獲鳥が奇声を上げ、その身体を僅かずつ、錆び付いた機械の様なぎこちなさで、動かし始めた。

「真名を用いた“縛り”を、こうも容易く……。張福殿、急いで下さい！」

「お急ぎを、旦那様、北刀様。もう、長くは持ちません……」

一刀と張福が姑獲鳥の横を通り過ぎようとした瞬間、姑獲鳥は、麗儀の声で確かにそう言った。二人が思わず眼を遣ると、苦しげに息を吐く麗儀の顔が、そこにあった。

「麗儀、お前——！！」

麗儀は、悲痛な声で自分を呼ぶ張福に向かって、眼に涙を浮かべ、哀しそうに微笑んだ。

「旦那様、申し訳ありません。北刀様、旦那様と坊ちやまを、お早く……」

「約束は、守ります」

一刀がそう言って、麗儀の名を呼び続ける張福の肩を抱いて走り出すと、麗儀の口が、血を流しながら再びメリメリと裂け、再び双眸が紅く輝き出した。

「二人とも、急げ！！」

通路への入口を確保していた華雄は、走って来た二人を先に通すと、哀しそうに姑獲鳥を一瞥し、再び殿になって二人の後に続いた。張福は、出口への通路をひた走りながら、何度も何度も、後ろを振り返っていた。

華雄が洞窟から走り出た瞬間、洞窟の奥から、恨みの籠った叫び声が、空気を揺さぶる振動を伴って響いた。

「おのれえ、哀しやなあ。我が子は必ず取り戻してくれようぞ。うぬ等の血肉も、必ず喰ろうてくれようぞ」

華雄が洞窟の暗がりを見つめながら、茫然とそれ聞いていると、いつの間にか横に立っていた一刀が、華雄に話しかけた。

「將軍、斧の刃を、少しこちらに傾けて頂けますか？」

「？お、おう」

華雄が言われた通りにすると、一刀は、差し出された金剛爆斧の刃に自分の指を滑らせた。続いて、その傷口の血を洞窟の入り口の地面に数滴垂らして跪き、右の掌をその上に当てる。

「オン・キリク・シュチリ・ビキリタナダ・サルバ・シャトロ・ナシャヤ・サタンバヤ・ハンハンハン・ソワカー——」

一刀が静かにそう唱え終わると、地面に青白い光が走った。

「一体、今度は何をしたのだ？」

「大威徳明王大心咒です。本来なら調伏の為のものなのですが、結界として用いました。これで、暫くは持つでしょう」

一刀は、「ふうん」と、曖昧な返事をしている華雄に僅かに苦笑を洩らすと、洞窟の闇に顔を向けた。

「おう、来るがいい！しかし、明日の晩までに来なければ、我等はこの子を、お前の目の届かぬ所に隠してしまうぞ！」

「北刀様！？」

一刀は、当惑して自分を見つめる張福に向き直って微笑んだ。

「良いのです。どの道、放っておいても“あれ”は御子息を奪いに来ます。予め迎え討つ準備が出来た方がマシだ」

一刀はそう言って、二人に『帰ろう』と、身振りで示した。
その先には、いつの間にか、淡い光を纏った蝶が一匹、静かに舞
っていた――。

姑獲鳥 第三章（後書き）

今回のお話、いかがでしたか？

因みに、作中に出て来る『呪』と言う概念については、本家本元の夢枕先生が、『陰陽師』シリーズの中で毎回取り上げていらっしやるので、敢えて言及しておりません。

興味を覚えられた方は是非どうぞ。

作中に使わせて頂いた原作のネタに全て気がつかれた方は、どの位いらっしやるのかなあ？

また、マンガ版も出ており、こちらも原作者お墨付きの完成度ですので、お薦めです。

では、また次回、お会いしましょう！！

姑獲鳥 第四章（前書き）

今回の作品で、完成している外伝は全部です。

では、どうぞ！

姑獲鳥 第四章

壺

結局、一刀たちが張福の屋敷に帰り着いたのは、空が白み始める直前であった。

一刀は、櫛の皮を剥いた物を幾本かと、細い麻縄を出来るだけ用意するように張福に頼むと、借り受けた硯で墨を摺り、一心に何事かの呪文を唱えながら、苦しそうに息をする兼常けんじょうの臍を中心に、不可思議な文様を描いていた。

「これで、助かるのか？」

心配そうに事の成り行きを見守っていた華雄が、筆を置いた一刀にそう尋ねると、一刀は小さく微笑んだ。

「まだ分からねえ。この子を見つけた時に瘴気祓いの札を抱かせたから、今は辛うじて小康状態を保ってはいるが、これから行う祭儀に耐えられるかどうかは、信じるしかない。ともあれ、もう少しこうしておいて、出来るだけ自然に瘴気を出させてしまった方が良いでしょう」

一刀はそう言うと、醜く爛れてしまっている幼い兼常の頭を優しく撫でた。

「それほど大変なものなのか？その祭儀とやらは……」

「いや、簡単に言えば、悪いモノを吐き出させるだけだ。大人ならば、どうと言う事はないが——嘔吐と言うのは、意外と体力を使

うものだからな。こんな小さな子には辛いだろう。ましてや、相当な量を出さないといけないからな」

「そうなのか……。確かに、あの息の詰まる感じは私も嫌いだが――」

「呑気な事を言っている場合じゃないぞ、華雄。お前にも、手伝って貰うんだからな」

「なに！？ 私には方術の心得など無いぞ！」

「心配はいらないよ。お前は、“いつも通り”にすれば良いだけだ」
一刀は、慌てる華雄に向かって言った。

「いつも通り？」

「ああ。俺は、この子の中の瘴気を固め、凝縮して吐き出させる。しかし、吐き出された瘴気は、宿主を求めてこの子の中に戻ろうとするだろう。だから、その前にお前に瘴気を“斬って”もらいたいのさ」

「なんだ、そう言う事か！ それ位ならお安い御用だが――その瘴気とやらは、私の斧で傷を付けられる代物なのか？」

「俺がお前の斧に呪いまじなを掛ける。それで大丈夫だよ。だが、チャンス――いや、機会は一度きりだ。二度は、この子の体力が持たないだろうからな」

一刀の言葉に、華雄は美しい銀髪を揺らして、静かに頷いた。

二人のそんな会話から暫くして、張福が両手の一杯に櫛の枝と麻縄を抱えて戻ってきた。

「これで、足りそうですでしょうか？」

そう言って一刀の前に両手の物を置いた張福の顔は、昨日の昼間より、十も老けてしまったようだった。無理も無いだろう。

漸く一人息子を取り戻したと思ったら、その犯人が、妹よめと違って可愛がってきた女が変わり果てた、異形の怪物だったのだから。

「あの、北刀様……」

十分だと返事をして、櫛の枝の中から手頃な物を選別している一刀に、張福は恐る恐るといった様子で話しかけた。

「何でしょう？」

「萩——いえ、麗儀の事なのですが」

「はい」

「あれは、助かるのでしょうか？」

「そうですね。あなたの言う、“助かる”の意味が、“元に戻る”と言う事であれば——」

一刀はそこで、櫛の枝を選別していた手を止めて暫く逡巡した後、張福に視線を戻した。

「無理でしょう」

「そんな！お前は、麗儀殿は『憑かれた』のだと言ったではないか」
がつくりと肩を落とした張福に代わって、華雄が叫んだ。

「はい。麗儀殿は、頻繁に山に入っていたとの事。山という場所は、古来より異界への入り口であるとされています。恐らく、麗儀殿の心の奥底にあった闇——我が子を失った時の絶望が、異界の住人を引き寄せてしまったのでしょう」一刀はそう言うと、立ち上がって、兼常の眠る小さな寝台の四隅に、櫛を麻縄で括り付けた。

「なら、憑いたモノを祓えば良いのではないのか！？」

「それが、出来ないのですよ」

一刀は、華雄の苛立ちを受け流すようにそう言って、寝台の柱の間に緩く麻縄を張っていく。更に、麻縄の寄り目の間に、予め作っておいた真つ白な紙垂しでを挟みこむと、一刀は漸く華雄に顔を向けた。
「麗儀殿と憑いたモノは、完全に“混ざり合って”しまっているのです。華雄將軍」

「混ざる……？」

「はい。本来、自身の内から生じた以外のモノ、つまり、他人の生霊や死霊、妖異などが、取り憑いた人間の魂や肉体と完全に混ざってしまう事など、そうあるものではありません。何故なら、人間と一度形を成した怪異は、この世界に存在する為の“理”が違うから

です。例えるならば、水と油のように」

「それが、混ざってしまった、と？」

「そうです、將軍。我々のような者は、人という“水”の上に浮いた、憑きものという“油”を、術という“網”で掬い取る訳ですが――混ざる筈のない水と油が混ざってしまった液体の中から、再び油だけを掬い出す網など、私は持っていないのです。いえ、私だけでなく、人の身が使役できる様な術では、魂の在り様を自在に弄り回すなどと言う事は、とても……」

「それでは……それでは、麗儀殿が余りに哀れではないか!!」

華雄は俯きながらそう怒鳴ると、やり場のない怒りをぶつけるように、金剛爆斧の石突で床を打ちすえた。余りに力を込めて金剛爆斧を握り締めている為に、その柄がギシギシと軋む音が、はつきりと一刀と張福に聞こえた。

「子を失い、伴侶を失い、それでも精一杯生きてきた結果がこれでは、いくら何でも哀し過ぎるではないか……」

次第に萎んでしまった華雄の言葉が落とした沈黙を破ったのは、黙って一刀と華雄の会話を聴いていた張福の、獣の咆哮の様な慟哭だった。その姿を、一刀は静かに、華雄は、自分の瞳に溜まった涙を拭うのも忘れて、呆然と見ていた。

式

「あれの、麗儀の子を奪ったのは、私なので御座います――」

押し寄せた激情が去って落ち着きを取り戻した張福は、両手で頭

を抱えながら、唸るようにそう言った。

「『口減らし』、ですね……?」

張福は、一刀の言葉にゆっくりと頷いた。

「はい——その当時、この益州は劉璋様の御領地で御座いました。御遣い様と劉備様がおいでになられる以前の事です」張福は、絞り出す様な声で話し始めた。

父、劉焉の後を継いで益州牧となった劉璋は、配下の貴族達の専横を抑えきれず、瞬く間に益州の経済を衰退させてしまった。貴族達は、主の優柔不断を良い事に甘言を弄し、次々と重税を課す旨の法を承認させて、それを自分たちの懐に入れ出したのである。

やがて、劉璋が唯一心を開いていた慈善医術団体『五斗米道』の指導者である張魯の諫言すらも、劉璋の耳に入る前に握り潰されるようになったと言う噂が実^{まこと}しやかに囁かれ出し、政^{まつりごと}は更に乱れた。

それでも、古参の重臣である嚴顔將軍の治めているこの巴郡一帯は、他に比べればまだマシな方だった。嚴顔將軍は、政權を口煩く批判していたものの、数少ない勇将でもあった為に、幕僚達もあえて刺激しないように、細心の注意を払って接していたからである。ところが、その危うい安寧も、遂に終わりを告げた。

増長し、熟れ過ぎた果実の様な甘い享楽に溺れた貴族達は、最後の箍^{たが}すら外れたのか、直接成都に税を納めるよう、嚴顔將軍の頭越しに巴郡の民に法令を発したのである。嚴顔將軍は激怒して成都に猛抗議をしたものの、成都は『これ以上の君主に対する暴言は、謀反の意思有りと見なす』という内容のそっけない書状一枚を送りつけて、それきり沈黙してしまった。

これは、嚴顔將軍が書状を受け取った時にその場に居合わせた兵士の口から、たちどころに近隣地域に広げられた話である。そしてとうとう、張福の治めるこの村にも成都からの使者がやって来て、昨年の倍にもなろうかという量の年貢を要求してきた。期日までに納めなければ、反逆者として村を焼くと一方的に宣告され、張福は

悩んだ。

「この白髪も、その時に出来ました。信じて頂けないかも知れませんが、それまでは若者の同じ様に、まっ黒でしてね。ちよつとした自慢だったのですよ。終いには、赤い小便まで出る始末で——」張福は自嘲気味にそう言つて、自分の頭を一撫でしてから、話を再開した。

本来、税のというものは、その対象となる町なり村なりの人口や、収穫高、商いの売上などを計算した上で決められる物である。今迄ですら、自分たちが如何にかこうにか食べていける以外の物は、全て税に宛がって漸くという具合だったのに、現在村人たちが持っている田畑から採れる量以上の年貢など、どう考えても払える筈はないのだ。

ありがたい事に、厳顔將軍が城の備蓄米を巴郡の村々に極秘裏に流出してくれたおかげで、村の蔵に残った僅かな備蓄米と自分たちの食糧分とを切り詰めて、如何にか年貢は納める事が出来た。しかし、残った食糧だけでは、どう足掻いてみても冬は越せない事は明らかだった。

村人たちは、奉公に出せる歳の子供は奉公に出し、他の村も同様の有り様で嫁の貰い手などある筈もなかったから、ただ同然の金で泣く泣く女衞ぜげんに娘達を売った。

「あれは、本当に生き地獄の様な時でした。村の年寄りの中には、孫に自分の食事を与えて餓死する者や、自分から命を絶つ者まで居りましたから——。不運な事に、麗儀の子は、そんな年の秋に産まれ月を迎えたので御座います。自分たちが食べるのもやっとなつた事もありますが、何よりも、身を切る思いで親を捨て、子供を手放した村人たちの手前、私は麗儀たち夫婦に、子を育てて良いとはとても……」

「成程——だから麗儀殿はあの時、『私から二度も子供を取り上げるのか』と、言っていたのだな……」張福は、華雄の言葉に力

無く頷くと、再び身体を震わせて涙を流した。

「私は、子を奪ったのみならず、あれを化け物にしてしまいました。他に方法がなかったのかと思うと……」

「元に戻す事は出来ませんが、せめて、業を軽くして上げることが出来るかも知れません」

一刀は、人目を憚らずに涙を流す張福を暫く見つめた後、呟くように言った。

「まことで御座いますか!？」

弾かれたように顔を上げた張福に対して、一刀は小さく頷いた。

「ええ。最も、麗儀殿が、私が必要としている物を持ってくれば、ですが――」

「必要としている物？」

「はい。張福殿、宜しければ、後ほど麗儀殿の部屋を見せて頂けませんか？」

「勿論です。麗儀の苦しみを少しでも拭えるのなら……!」

「まだ、何とも言えませんが、最善を尽くしましょう。ともあれ今は、御令息の方を先に片づけてしまわなければ。もうそろそろ、頃合いの筈ですから」

一刀は、張福の肩に優しく手を置いてそう言ってから、華雄の方に顔を向けた。

「華雄將軍、準備は宜しいですか？」

華雄が唾を飲み込んでから頷くと、一刀は華雄の傍に歩み寄り、

「では、斧の刃を此方に」、と静かに言った。

「オン・マユラ・キランディ・ソワカー――」

華雄が斧を傾けると、一刀はその刀身に掌を当て、静かに呪文を唱えた。次の瞬間、斧の刀身が淡く翠色に輝いたかと思うと、吸い込まれるように消えた。

「毒蛇を喰らう、孔雀の神の力を封じました。これで、瘴気の塊も斬れる筈です」

「応、任せろ」

一刀は、力強くそう言った華雄の顔を見て満足そうに頷くと、兼常が横たえられている小さな寝台の傍らに立って呼吸を整え、華雄達たちの聴いた事の無い、不思議な呪文を唱え出した。それは、今迄に一刀が唱えていた呪文とは明らかに異なる抑揚を持ったもので、まるで、遠い異国の言葉で作られた詩を詠^{うた}っているようにも聴こえた。

華雄は、一刀が紡ぎ出す言の葉が、その場に眼に見えない“何か”を満たしていく気配を感じながら、瞬きを忘れ、一心に兼常の口元を見つめていた。初動を見極める事は、“敵”が人であれ妖異であれ、変わりはないと思ったからだ。

まして、仕損じれば、眼の前で苦しんでいる罪も無い赤子を死なせる事になる。

「(そんな事をさせてなるものか……)」

華雄は内心でそう呟くと、更に感覚を研ぎ澄ました。

やがて、苦しげに息をしていた兼常に変化が起き始めた。まるで、一刀の詩の抑揚に合わせるように、身体を被っていた瘡が蠢き出したのである。

華雄の隣で、張福が息を呑む音が聞こえた。瘡^{そう}は、皮膚の下を這いずるようにして、ゆっくり、ゆっくりと、兼常の喉に向かって集まって来ているのだった。

一刀は静かに眼を開き、瘡が兼常の喉の下辺りで瘤の様になっているのを確認すると、右手の人差指と中指を立てて軽く唇に当て、左手を瘤の上に翳して、詩を詠う速度を速めた。すると瘤は、一刀の掌に追い立てられるようにして蠢き、痰の絡まった時のような不快な音を立てて、兼常の喉に消えた。

兼常の喉から、藻の浮かんだ沼の水のような色の霧が立ち上ったかと思った次の瞬間、

ゴシヤッ!!

と言う、何とも形容しがたい湿った音と共に、握り拳大の“モノ”が吐き出され、凄まじい速度でそのまま空中を飛びまわり始めた。その様子は、まるで小さな台風のようなのだ。

逆巻き、荒れ狂いながら、唸り声にも似た風音を響かせている。いや、もしかしたらその音は、本当に声なのかも知れない。

居心地の良い巣穴から無理矢理に迫り立てられた形無き獣の、苛立ちと怨嗟の。

華雄は呼吸を止め、切れ長の瞳をずっと細めて、兼常の口の上の空間に、全神経を注いだ。

無秩序に飛び回る“それ”の行動を予測出来る場所はただ一点、再び兼常の口に入ろうとする瞬間だけだからだ。

失敗は、許されない。

“それ”は、不快な臭いを孕んだ風と共に部屋中を蹂躪してから、一際高く舞い上がると兼目がけて、獲物を見つけた猛禽の如く、凄まじい勢いで急降下した。

しかし、“それ”が兼常の口に再び戻る事はなかった。

華雄が振り抜いた金剛爆斧が、鋭い風切り音と共に奔り、“それ”を中心から真一文字に両断したのである。

華雄が、二つになった“それ”が霧散して消えるのを確認して、気が抜けたように床に尻もちをついたのと同時に、後ろで見守っていた張福が、弾かれたように兼常の枕元に駆け寄って行く。入れ違いに、一刀が華雄の前に来て、右手を差し出た。

「お疲れ様でした。将軍」

「ふん、大した事ではない……」華雄はそう言いながらも、少し頬を赤らめて一刀の手を掴んだ。

「あの子は、もう良いのか？」

「ええ。あとは、ゆっくり休ませれば大丈夫でしょう」立ち上がった華雄が尋ねると、一刀は微笑みながらそう言った。

二人が寝台に近付くと、張福は息子の名前を呼びながら、優しくその頭を撫でているところだった。

「ほお———！」

兼常の様子を見た華雄はそう呟くと、驚いたような顔をして腕を組んだ。兼常が、先程まで醜く爛れていたとは思えない、皮を剥いたばかりのゆで卵のような滑らかな顔で、父親に笑いかけていたからだ。

「ああ、華雄將軍、北刀様！ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます……！！」

張福は二人に向かって振り返ると、組んだ両腕を頭の上に掲げながら、床にひれ伏した。

「いえ、間に合って何よりでした」

照れくさそうにそっぽを向いて頬を掻いている華雄を横目で見た一刀が、一瞬『仕方ない』というように肩をすくませてから進み出て、張福を立たせながら言った。

「張福殿。夜が明け切ったら、村の方に頼んで、奥方を安全な処に送ってもらって下さい。御子息の事は、まだ伝えずに」

「はあ、それは構いませんが———。何故、妻に息子の事を言っていないのでしょうか？」

一刀の言葉に、張福が小さく首を傾けて尋ねた。

「御子息には、麗儀殿がこの家に来るまで、ここに居て頂かければなりません。他の場所に移せば、麗儀殿は御子息の“匂い”を感じ取り、そちらに向かってしまうでしょう。しかし、この家の中ならば、元々そこかしこに御子息の“匂い”が染みついておりますから、正確な位置を知られぬ程度に弱い結界を張れば、自然に御令息を隠す事が出来ます」

張福は、一刀の言葉に素直に頷いたものの、不思議な顔で口を開いた。

「分かりました。しかしそれならば、妻に息子を任せて、一緒に隠

れさせた方が良いのでは？」

「お気持ちには御尤もですが——張福殿、先程も言った通り、麗儀殿を“元の戻す”事は出来ません。つまり、どの道、麗儀殿と奥方を再会させる事は出来ないのです。それならば、奥様には離れた場所に居て頂いた方が、残酷な言い方ですが、後々の言い訳も立ちます……」

一刀は、ハツとして自分の顔を見返した張福に頷いて、言葉を続けた。

「奥方には、昨夜から今迄に起こった事を今は何も話さず、今日の夜に起こった事としてお話すれば良いのです。“全て”が終わった後に——『麗儀殿は、御令息の身を案じて我々に同行し、命を賭して御令息と我々を助けてくれた』、と。どこも間違っていないでしょう？」

「……そう……ですね。妻も、麗儀の子を奪ってしまった事を、ずっと悔いておりました。いえ、子を産んだ事のある分、私などよりもずっと——。北刀様のおっしゃる通りにするのが、一番良いのかも知れません」張福は、魂を絞り出すような溜息を吐きながらも、悲しげにそう言って頷いたのだった。

参

一刀は『もしも自分が間に合わなかった時の為に』と言って部屋の周囲を回って結界を張り、華雄と張福に幾つかの指示を出したあと、夜まで少し寝ておく様に言うと、自分は“準備”をする為だと言って、麗儀の住んでいた離れの部屋に籠もってしまった。

それから一刻ほどして、妻を送り出した張福が、兼常を見守りながら簡単な食事を摂っていた華雄の元に帰って来た。

「申し訳ありません、將軍。御迷惑をおかけしているのに、粗末な物しかお出しできず……」

張福は、部屋に入って扉を閉めるなり、開口一番にそう言って頭を下げた。女手が無くなってしまったので、まともな料理が出せない事を気にしているのだった。

「なに、強行軍の時の兵糧に比べれば、十分旨いし豪勢だ。心配には及ばん」

華雄はそう言って笑ってみせると、「女房殿はどうだった？」と、張福に尋ねた。

「はい。北刀様に言われた通り、『お二人と共に山に入って来るが、化け物が追いかけてくるかも知れないから用心の為に』と申しましたら、素直に信じたようで御座います」

「そうか――」

「ええ……。あの、將軍。息子はどんな様子で御座いますか」

張福が、沈黙を恐れるようにそう尋ねると、華雄も何故か慌てたように答えた。

「お、おお。今更疑っていた訳ではないが、あいつの『札』は本当に良く効くようだ。あれからずっと、ぐっすり眠ったままだ」

華雄の言葉に頷いた張福が、寝台に近づいて兼常の顔を覗き込むと、息子は安らかな寝息を立てて眠り込んでいた。一刀が、『奥方が居る内に泣き出されたら気づかれてしまうし、体力が落ちているから寝かせた方が良い』と言って、麗儀の部屋に行く前に新しい札を書き、兼常の懷に忍ばせたのである。

「本当に凄い道士様ですね、北刀様は……」

「ああ、そうだな。その札も、明日の朝まで効き目が持つらしい。もし自分が戻らない内に夜になっても良いように、だそうだ」

華雄は張福に同意してそう言うのと、程良くぬるくなっていた茶を

飲み干し、しきりに感心している張福に、改めて声を掛けた。

「張福殿。そなたも、何か腹に入れてから少し横になると良い。例え寝られずともな。秋の夜は長いのだ、休める内に休んでおかねば、いざと言う時に役に立たんぞ」

「はい。しかし、將軍はお休みになられないので？」

「私も、ここで少し休むさ。それに、この位は疲れた内に入らんよ」
「はい——」。では、御言葉に甘えさせて頂きます」

張福は一瞬、逡巡する様子を見せたものの、結局は納得したようにそう言って、一礼してから部屋を出て行った。華雄は、張福の足音が遠ざかるのを聴いてから、腰を上げて兼常の顔を覗き込み、壊れしてしまうのを恐れる様な、何ともぎこちない手つきで、静かに寝息を立てている兼常の頬を撫でた。

「愛らしいものだな、赤子というのは」

華雄は、ポツリとそう呟いてから、自分が口にした言葉に驚くような顔をした。

その唐突に訪れた、何とも不思議な、しかし決して不快ではない妙な感覚に、戸惑ってしまったのである。

「斧を振るう事位しか取り柄がなくとも、やはり私も女の端くれだったようだな……」

華雄は、その感覚の正体に気づいて面映おもはゆそうに微笑むと、最後にもう一度だけ兼常の頬を撫でてから、先程まで座っていた長椅子に戻り、肘掛けを枕に身を横たえて目を閉じた。

結局、夕暮れになって華雄が目覚まし、張福が部屋に戻って来ても、一刀は姿を現さなかった。

秋の空は、少しずつ藍色に染まろうとしていた。

姑獲鳥 第四章（後書き）

今回のお話、如何でしたか？

この作品をT I N A M Iに投稿した時、コメント欄にて、ある質問を頂きました。

それは、この作品が夢枕獏先生の『陰陽師』の他に、京極夏彦先生の『姑獲鳥の夏』のパロディでもないのか、もしそうなら、きちんと表記すべきだ、と言うご指摘です。

コメントを下された方がおっしゃるには、一刀が華雄に対して『怪異とは何ぞや』を説明する辺りに、かなり内容が類似した項があるとの事でした。

もしかしたら、こちらでも同様の疑問をお持ちの方がいらっしゃるかも知れないので、一応説明をさせて頂きます。

詳しく知りたい方は、『陰陽道』でググるなりして頂けると解るかと思いますが、陰陽思想においては『森羅万象の全ては、陰と陽が互いに存在して初めて一つの要素である』としています（ちなみに、陽は善で陰が悪、と言う訳ではありません）。つまり、妖異と言う存在は、それを肯定し、存在すると信じる人間がいて初めて、この世に存在出来る訳です。

これは妖異のみならず、神様などにも言える事でしょう。多少言い訳じみて聞こえるかもしれませんが、以上の事は、既に陰陽思想の根幹としてある考え方ですので、読者に物語内における“怪異”のポジションや定義を説明する必要が生じた場合、デテールに多少の差こそあれ、陰陽思想と言う思想を共通のモチーフにしている作品であれば、どうしても表現が似通ってしまうと思います。

ただ、『陰陽師』シリーズはそれをそのまま受け入れた（最も、ある程度は科学的な視点で語られている事もあります）“怪奇譚”であるのに対し、『京極堂』シリーズは、科学や民俗学の観点か

ら理論的に、憑き物落としや怪異のメカニズムを解明した“怪奇ミステリー”である事には、大きな違いがあります。

また、姑獲鳥と言う文字を“うぶめ”と読む事が、京極先生の作品タイトルで余りに有名である事も、大きな要因でもあったようなので、“こかくちょう”と“うぶめ”の違いについても書きます。姑獲鳥こかくちょうは本来、中国の妖怪で、作中で書いた通りの習性を持っています。しかし、日本の『うぶめ』は妖怪ではなく、妊婦の怨霊です。

日本において姑獲鳥を“うぶめ”と呼ぶようになったのは、鳥山石燕という浮世絵師が、『画図百鬼夜行』という画集に、本来“産女”と書いて『うぶめ』と読む妊婦（或いは子供を抱いた母親）の怨霊を、産婦の霊が化けたものだと言う説がある姑獲鳥と混同し、『姑獲鳥うぶめ』と当て字にして記した事で定着したからとか、茨城に伝わる“ウバメドリ”という怪鳥が、上記したのと同じ理由で同一視されたからだと言われています。

京極先生がモチーフにしておられるのは、この混同された後の『うぶめ』、つまり、妊婦の怨霊の方ですね。元々が“母親”と言う存在が関わってくるモノですが、妖怪と怨霊（つまりは幽霊）は厳密には違うカテゴリーです。

以上の理由から、私自身は『姑獲鳥の夏』をパロディの元ネタにしたつもりはありませんでした。

以上、長文にお付き合い下さり、ありがとうございました。

では、また次回お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5282q/>

真・恋姫†無双異聞～皇龍剣風譚～ 外伝

2011年10月8日14時25分発行